

幼児期における性教育に関する幼稚園教諭の認識

小野敏子¹⁾ 野田洋子²⁾ 荒木こずえ³⁾ 増田美恵子⁴⁾

要旨

幼児期における性教育のあり方を検討する基礎資料とするために、幼稚園教諭の性教育に関する認識に目をむけて、フォーカスグループインタビュー法で調査した。その結果、以下のことが明らかになった。①性の教育は、必要性に否定的であったり、生殖に関する内容に限定してとらえる傾向にあった。②生の教育は【生きていることを感じる】、【自分の体を大事にする】、【相手を思いやる】、【いろいろな子がいる】、【生きる力をつける】の5つのカテゴリーに分けられ、幼稚園教育要領をもとに内容が充実し、必要性も肯定されていた。しかし、③性の教育を幼児期に行うことや、その内容が子どもらしさを損ねる可能性がある、ととらえていた。幼稚園教諭が行っている教育は、性と生双方に結びつくものと捉えることが可能だが、その認識が見られないということがわかった。

キーワード：幼児期、性教育、生教育、幼稚園教諭の認識

I. はじめに

日本の性教育は、思春期に重点が置かれ、幼児期の性教育には消極的である。オランダやスウェーデンのように、人間の生に基づいた性教育を早い時期から始めたほうが良いとする考え方からいけば、日本の性教育はその開始時期や教育内容に検討の必要があると考える。

幼児期は母親の安全基地から分離し、社会に適応していく時期であり、人格形成に大きく影響していく時期でもある。この時期にどのような経験をしていくかは、その子どもの将来に影響を与えていく。

性教育とは、人間の発達に伴いその発達段階に応じて、生涯にわたり行われていくものである¹⁾。幼児期における性教育にも同様のことがいえる。人間形成の基礎は幼児期にあり、人間教育として生命尊厳の基盤となる性教育が幼児期に行われることが望ましい。

文部科学省は、発達段階に応じた性教育の目標および指導内容を体系的に示している²⁾。

それによると、幼稚園における性教育の目標は、「生命の尊さを感じ取る」、「男女の人間関係の基礎を築

く」、「いたわりあう心と自分の欲求を抑制する心を育てる」とされている。

幼児期から性教育を開始することには様々な異論がある。しかし、現在の日本社会においては、テレビやマスメディアを通して多くの性に関する情報が氾濫しており、幼児期も含め、それらの情報にさらされていると考える。

生涯にわたる健やかな発達のためには、性教育＝生教育（人間の尊厳を以ってよく生きるための教育）としての取り組みが幼児期から重要であること³⁾を検討すべき時期になっているのではないか。生命の尊重の理念や、将来、性に関する情報や行動に対する確かな判断力、自己決定力が身につけられるように幼児期の発達課題に応じた性教育が必要であると考え。性の教育は生の教育と分かちがたいところがある。実際に幼児教育に関わる幼稚園教諭は「性と生の教育」をどのようにとらえて関わっているのか、その認識を知ることは幼児期の性教育を考えるにあたり意義があると考え。

そこで、幼児期における性教育のあり方を検討するための基礎資料として、現場で働く幼稚園教諭の性教育に関する認識に目をむけてフォーカスグループインタビュー法にて調査したので、ここに報告する。

1) 川崎市立看護短期大学

2) 岐阜大学医学部看護学科

3) 川崎市立看護短期大学

4) 日本助産師会

II. 研究方法

1. 対象者

東京都内および近県の幼稚園に勤務する幼稚園教諭 22 名

2. 研究期間

平成 17 年 3 月から 8 月まで

3. 調査方法

フォーカスグループインタビューの特徴として、個人面接法と比較してグループとしての意見を構築することができる、相互作用による意見の引き出しができる、プレッシャーが少ないなどのメリットがあるため、フォーカスインタビューグループ法を行った。対象者の勤務する幼稚園ごとに 3 つのフォーカスグループを編成し、インタビューガイドを作成した上でインタビューを行った。インタビュアーは文献⁴⁾に書かれている役割のポイントを確認し、事前に練習をしてからインタビューに臨んだ。

質問は半構成的な質問とした。1) 性についての子どもの質問とそれに対する対応、2) 現場で幼児期の性と生の教育をどのように行っているか、3) 幼児期の性と生についての教育に対する考え、4) 幼児期の性と生の教育に関して問題と思うこと、以上 4 項目である。インタビュー内容は対象者の了承を得て、カセットテープに録音した。

4. 分析方法

フォーカスグループごとにインタビューの逐語録を作成し、それぞれに発言内容からカテゴリー、サブカテゴリーを抽出した。

5. 倫理的配慮

研究協力者に対して、1) 研究の主旨とインタビュー内容に関するプライバシーの保護に配慮すること、2) 研究への参加は任意であり、3) いつでも研究参加の辞退が可能であること、4) 研究結果は研究の目的以外に使用しないこと、5) インタビュー内容のカセットテープへの録音およびテープの確実な破棄について、以上 5 項目を文書で説明し、同意を得た。

III. 結果

1 グループの人数は 7～8 名で、年齢構成は 20 代から 40 代であり、全員女性であった。インタビューに要した時間は 60 分であった。

1. 性についての子どもの質問・行動とそれに対する対応

1) 性についての子どもの質問と対応

性についての子どもからの質問は、【生命の誕生】、【性差の違い】についてであった。【生命の誕生】では、「赤ちゃんはどのようにして生まれるのか」、「どこから生まれるのか」、「結婚するとおなかに赤ちゃんがいるのか」、などであった。「どこから生まれるか」の質問は、幼稚園だけでなく、教諭自身が親として、自宅で子どもといっしょに入浴したときに質問されることが多く見られた。幼稚園教諭の対応は、「細かい説明はしない」、純粹に赤ちゃんができることに不思議さを感じていると思うが、「体をみることをやめなさいとも言えず困った」などであった。妊娠している教諭に対しては、質問はないが腹部が増大すると優しさをしめしていた。【性差の違い】では、トイレや着替えの場面で質問されることが多く、「おちんちんなんでないのか」、「男の子がトイレで立ってするのはなぜか」などであり、その対応としては、「細かい説明はしない」、「排泄のしかたの違いを説明する」などであった。また、幼稚園教諭に対し、保護者から「家ではリアルな質問が多い」、「お風呂で質問される」、「他にもいろいろ聞かれる回数が多い」ことが話されていた。(表 1)

表 1 性に関する子どもの質問

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|-------|--|
| 生命の誕生 | 赤ちゃんはどこから生まれるのか 赤ちゃんはどのようにして生まれるのか 結婚すると赤ちゃんができるのか |
| 性差の違い | 男女の性器の違い、おっぱい 男の子はどうして立っているのか |

2) 性の興味からくると思われる行動と対応性の興味からくると思われる行動は、【異性に対する行動】、【自分に対する行動】であり、「異性の体をみたがる」、「体にさわりたいがる」、「トイレを覗く」、「パンツの中に手をいれる」などであった。幼稚園教諭はこれらの行動を、「性的なものというより興味、関心でやっている」と捉えていた。対応は、人の嫌がることはしない、トイレは遊び場ではないと「注意する」、「叱ってやめさせる」などであった。また、パンツの中に手をいれる子どもの行動については、「とまどい」を感じており、「止めてもいいものか対処に迷った」と

いう意見があった。男の子の勃起については「体の自然な変化」と捉え、「そっとしておく」、「見てみぬふり」をしていた。「マットにこすりつける」行動については、「気をそらすような働きかけ」をしていたが、「発達に伴いしなくなるのだろうか、このまま様子をみていればいいのか迷う」という意見もあった。(表2)

表2 性の興味からくると思われる行動

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|----------|-------------------------------|
| 異性に対する行動 | トイレを覗く スカートめくり おっぱいをさわる |
| 自分に対する行動 | おちんちんいじり マットにこすりつける |

2. 現場で幼児期の性と生の教育をどのように行っているか

1) 性の教育

生命の誕生や性差について、絵本を使って子ども達に話をしているが、性の教育とは意識していなかった。

2) 生の教育

生の教育は【生きていることを感じる】、【自分の体を大事にする】、【相手を思いやる】、【いろいろな子がいる】、【生きる力をつける】の5つのカテゴリーに分けられた。

【生きていることを感じる】では、兎や虫の飼育をすることを通して命の大切さを教えていた。また、植物を育てることで、植物も生きて成長していることを教えていた。【自分の体を大事にする】では、思わぬところで怪我をすることがあるので、自分の身を守ることができるようになってほしいと考え「危険の対処の仕方」を教えていた。また、自分の体を大事にできるようになってほしいと考え、本を使っ

て体のしくみについて教えていた。

【相手のことを思いやる】では、実際の子ども同士の間わりの場面を通して「友達を叩かない」、「頭と顔とおなかは大事なところだから叩かないというルールをつくる」、「友達を傷つける言葉をいわない」などを教えている。

【いろいろな子がいる】では、小さい子、大きい子、足が遅い子など、「努力してもどうしようもないことをいうのはいけない」ことや、傷つけようと思わずに友達に言ってしまったことで相手が傷ついた場合、「相手の思いを代弁し、思いをわかってもらう」ことをしていた。

【生きる力をつける】では、子どもが、「自分の思いや考えが言える」ように関ることや、子どもができたという「達成感を味わう」ことができるように関わっていた。また、「やっといういいことと悪いことの判断ができる」ように関ることや、「自分の思いや考えを伝える」こと、子ども達が「自分たちで問題解決できる力をつけられる」ようにと考えて関わりをしていた。

【その他】では、飼育していた動物の死や祖父母や身近な人の死を通して、「生と死について」考える機会を作っていた。(表3)

3. 幼児期の性と生についての教育に対する考え方

性の教育については【性教育の必要性についての思い】、【性を教えることの難しさ】、【性教育をする際の方法】、【教えることの戸惑い】の4つのカテゴリーにわけられた。【性教育の必要性についての思い】では、必要性は感じていない、性の教育をすると子どもらしさが失われるなどがあげられていた。【性を教えることの難しさ】では細かいことを言っても子どもはわからないのではないか、子どもにわかりやすい言葉で答えられるようになりたいなどがあげられ

表3 生の教育

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|-------------|--|
| 生きていることを感じる | 動物の飼育を通して命の大切さに気づく 植物を育てることを通じて生きていることを感じる |
| 自分の体を大事にする | 自分の身を守るために危険への対処の仕方を知る 自分の体を大事にするために体のしくみを知る |
| 相手を思いやる | 友達を叩かない 頭と顔とおなかを叩かないなどルールをつくる 友達を傷つける言葉は言わない 相手の気持ちを考える |
| いろいろな子がいる | 努力しても変えられないことについて言うのはいけない 相手の気持ちを代弁し思いをわかってもらう |
| 生きる力をつける | やっといういいことと悪いことの判断ができる 自分の思いや考えが言える 問題解決できる力をつける 達成感を味わう |

た。【性教育をする際の方法】では、聞かれたときに対応する、全員いっしょに教える必要はないなどがあげられた。【教えることの戸惑い】では、指導する立場として自信がない、具体的にどう対応していいか悩むなどがみられた。その他、サブカテゴリーで「性教育とは避妊やセックス、コンドームの使い方」という性教育についての捉え方がみられた。

生の教育については、【生きているということをお伝えたいという思い】、【生きることを教える時期】の2つのカテゴリーに分けられた。【生きているということをお伝えたいという思い】では、自分が愛されて生まれてきたという実感を感じてほしい、男女の違いというよりいろいろな子がいることをわかってほしい、男女とも仲良く遊んでほしい、などであった。【生きることを教える時期】では、生きる力をつけるのは幼児期、子どもが自分を守る方法は教える必要がある、男女の違いを知りお互いに大事にすることは幼児期からわかってほしい、などであった。性の教育にも関係するが、生と性どちらも相手を思いやるのが大事、その基礎を学ぶ場は幼稚園という考え方もみられた。(表4)

4. 幼児期の性と生の教育に関して問題と思うこと

1) 性の教育に関して問題と思うこと

「性教育が早すぎると性犯罪が増えることにつながるのか」、「近年、性犯罪が多くなっているから性教育も早くなっているのかもしれないが、性教育が早すぎると性犯罪を増やすことにつながるのではないか」、という意見があった。また、「世間の言い分や周りの大人の見方をどの程度取り入れて考えればいいかわからない」、「セクハラもあるので、子どもを守るためには周りを気にすることは教えるべきとは思いますが迷いもある」、という意見もあった。

また、「幼児期に性教育をすると子どもらしさを失うのではないか」、「あまり現実をみてしまうと夢がなくなってしまうのではないか」、「幼児期には難しいことをあえてこちらからもちかけるのはどうかと思う」、「幼児期に知らなくてもいいことまでは言う必要はない」、「子どもが聞いてくる時が知りたい時だと思うので、その時に教えあげればよいと思う」など、「幼児期から性の教育をするのは早すぎる」という意見もあった。

その他、「指導する立場として指導の仕方がわからないし、自信がないのでお話のようにしてしまう気

表4 幼児期の性と生の教育に対する考え方

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|-----------------------|--|
| 生きているということをお伝えたいという思い | 自分が愛されて生まれてきたという実感を感じてほしい 男女の違いというよりいろいろな子がいることをわかってほしい 男女とも仲良く遊んでもらいたい 幼稚園では男女分けないでなかよく遊んでもらいたい |
| 生きるということをお伝えする時期 | 生きる力をつけるのは幼児期 子どもが自分を守る方法は教える必要がある 生の教育は幼児期から必要 自分の体を大事にすることは幼児期から教える必要がある 男女の体の違いを知りお互いを大事にすることは幼児期からわかってほしい 生と性どちらも相手を思いやるのが大事。その基礎を学ぶ場は幼稚園 人としてやっていいことといけないうことの判断を自分でできるように指導することは幼児期から必要 幼児教育はアットホームに、自然に |
| 性教育の必要性についての思い | 性の教育の必要性については感じていなかった 性の教育をすると子どもらしさが失われる |
| 性を教えることの難しさ | 細かく言っても子どもはわからないので骨折り損 精子と卵子といっても子どもはわからない 性のことを子ども達にわかりやすい言葉で答えられるようになりたい 生理がくるのが早いので簡単な性教育は小学低学年ですべき 生理や避妊具の使い方は小学高学年で教えるべき 性の教育は、興味がなければ伝えてもわからない 性教育とは避妊やセックス、コンドームの使い方 |
| 性教育をする際の方法 | 全員いっしょに教える必要はない 聞かれたときに対応する 動物を飼育しているので交尾の場面を使って教えることは可能 |
| 教えることの戸惑い | 指導する立場として自信がない 指導方法がわからない 具体的に教えられない 聞かれたらどう対応したらいいか悩む 人前で裸になることは恥ずかしいと教えたほうがいいのか悩む |

がする」といった、「指導方法がわからない人が行うこと」が問題とされているという意見もあった。

2) 生の教育に関して問題と思うこと

「ゲームやテレビの影響」と「核家族化」をあげていた。ゲームの影響では死んだという言葉が簡単に口にするようになったことがあげられていた。テレビの影響では、一方通行でコミュニケーションが取れない子どもや、心が育っていない子どもが増えた印象をもっていた。

核家族化では、祖父母の死に対していっしょに住んでいないことで、子どもが心構えがなく死をみせられることになることをあげていた。

IV. 考察

1. 子どもの性に関する質問や行動と幼稚園教諭の関わり方

身の回りのあらゆることに対する疑問が起こってくる幼児期の特徴から考えて、男女の違い、大人と子どもの体の違い、赤ちゃんの誕生などが子どもにとって不思議でならないのは容易に想像できる。これら性差を示す形状の違いなどへの子どもの質問は数や種類が比較的多く、それらに対する幼稚園教諭の受け止めは、「子どもの純粋な興味によるもの」、「違う体に興味を持つのは当然のこと」と肯定的であり、受容的であった。

「トイレを覗く」などの、成長過程の興味から来ると幼稚園教諭がとらえた行為への対応は①注意をする、②叱ってやめさせるなどであるが、幼稚園教諭の捉え方は「一般常識としてしてはいけないことなので叱っている」という認識であった。

しかし、性器いじりや自慰の場面では、発達としては当然と思いながらも戸惑いを感じており、この例の幼稚園教諭は見てみぬふりをした。幼児期の性器いじりは発達上問題がなく強く叱らないことがよいとされており⁵⁾、教諭の対応も正しいといえる。

「トイレを覗く」ことと、「自分の性器をいじる（自慰）」ことは、同じように発達段階に応じた過程であるとする幼稚園教諭の認識に差はないが、インタビューの中ではとまどいやためらいが幾つも見られた。

2. 性と生の教育について

幼稚園教諭は「生の教育」について、非常に具体的に生き生きと語っていた。日常の中で動物や植物に接するよう心がけ、絵本の読み聞かせなどを通し

て生命の大切さを子どもたちに伝えようとしている様子が細やかに表現されるなど、「生の教育」は必要性を理解し意図的に行っていたが、「性の教育」については、行っているという意識がなかったという特徴があった。生命の大切さを伝えるために、体のしくみや出産について絵本を使って教えているが、それは性に関する事柄でもあるという意識が希薄なのが特徴であった。

幼稚園教育要領では、生の教育として項目が設けられ、また定められた目標について指導の内容が具体的に示されている。このため幼稚園教諭は自信をもってできているという実感があるからではないかと考える。

1999年、文部科学省が「学校における性教育の進め方、考え方」⁶⁾を示した。性教育の今日的意義や考え方を示し、学校における性教育の進め方と指導内容が示されている。発達段階等に応じ「幼稚園における性教育の目標及び指導内容」¹¹⁾も同書にある。しかし、幼稚園教育要領ほどの細かさはなく、どのように進めるかなど、幼稚園教育要領に比べれば簡潔である。たとえば「幼稚園における性に関する発達課題と指導内容」をみると「幼児は男女の違いや便所の使い方の違いから、男女の性器の違いに気づくことがある。性器の大切さを知らせ、排尿・排泄のエチケット、体や性器の清潔保持の習慣を身につけさせる必要がある」と述べている。幼稚園教諭は、①性器の大切さ、②排尿・排泄のエチケット、③体や性器の清潔保持の習慣を身につけるための関わりを実際にはしているが、それらが性にも関わるとは意識されていない。

また、「心理的な発達に伴う性に関する発達課題と指導内容」では「動物や赤ちゃんは父親・母親がいてうまれることに気づかせるとともに、自分の誕生の喜びを感じさせることが大切である」と述べている。幼稚園教諭は、愛されて生まれてきたという実感がもてるような関わりをしたいと思っているが、この内容が性の教育であるという意識はない。

一部の幼稚園教諭からは、「性の教育も自分を大事にすること」、「子どもが愛されて生まれてきたことを感じることも性教育」と幼児期の性の教育と、生の教育とがかけ離れたものではないと捉える言葉も聞かれたが、多くは、性の教育を「避妊やセックス、コンドームの使いかた」、「月経について」といった、狭義の性、生殖に関する教育というとらえ方をしていることがうかがえた。

それが、多くの幼稚園教諭が、性器などに関する自分たちの教育を、生の教育ととらえ、性の教育は行っていないとする理由となっていると考える。

3. 性の教育に対する必要性の認識

社会と、性に関する情報や考え方は密接な繋がりを持つ。文部科学省「幼稚園における性教育の目標、指導内容」では、①有害情報から幼児を保護することとともに、周りの人の気持ちを考えて嫌がることをしてはいけないことを知らせる必要がある、②性被害から幼児を守ることが重要な課題である、と述べている。

幼稚園教諭も、幼児に対する性犯罪を重要な対処すべき課題として挙げており、意識づけ、必要性の認識は高いと思われる。その一方、「子どもらしさを失うのではないか」「現実をみてしまうと夢がなくなってしまうのではないか」などの意見が見られるなど、子どもへの教育として具体的に考えた場合の葛藤がうかがえる。

性被害を予防するための教育の必要性は感じているが、ではそれを実施するにはどのようにすればよいかという疑問は大きく、教育の結果が予測できない、あるいは子どもらしさを損ねてしまうのではないかととらえている姿もうかがえた。

4. 幼稚園教諭の幼児の性教育に関する認識

生の教育については、必要性から方法まで各項目にわたって肯定的意見のみであったが、性の教育については否定的もしくは態度保留の意見がみられた。

幼児の保護者で幼児の性教育が必要と考えているのは約6割と報告されている。幼児期の教育に携わる幼稚園教諭は性教育が必要と思っている人の割合が約3割であり、保護者に比べ幼児期の性教育の必要性の認識が低い⁸⁾。これは、幼稚園の時期くらいせめてこどもらしく、男女の区別をしないでいっしょに、などに表されているように、「子どもらしく」ということと「性」は相容れないものとみていることがうかがえる。幼稚園教諭は性教育について「まだ早い」、「必要ない」など否定的考えをもっていた。インタビューから浮かび上がる幼稚園教諭の疑問や葛藤は、その概念がないまま、「性の教育」=「性に関する知識」ととらえていることから起こっているものではないかと考える。性教育という言葉のもつイメージが、幼児とはかけ離れているために混乱しているのではないだろうか。

幼児期の子どもは知的好奇心が旺盛であり、特に3～4歳では、目に見えるあらゆることに関する質問をする。その質問に対応する保護者や幼稚園教諭は、子どもの発達をうながしていく必要があり、幼稚園教諭は意識的、積極的に関わっていた。

「性」とは「性行為」のみを示すのではなく、「生命の尊重」「自己の尊重」であるという前提に立てば、幼稚園教諭が積極的に行っている「生の教育」は「性の教育」と分かちがたい。

及川は「子どもは性に対する自己の見方ができていないので、社会の中で生きていく仕組みを知っていく過程と同様、性に対して偏見なく考えられるようになっていかななくてはならない。性に対する正しい意識を与えることが大切になってくるのである。」⁹⁾と述べている。さらに「こうした意味では、幼児期の性教育は重要な意味を占めていると考えられる。そのためには、保育者の性に対する偏見をなくし、性について自然に語れるようであればならないのではないだろうか。」¹⁰⁾としている。

たとえば、社会での役割を学ぶために「周りの人の気持ちを考えること」、「人の嫌がることはしないこと」などの教育は、幼稚園教諭が実際の関わりの中で子どもに教えていることである。これは幼児への教育として、「生」のみではなく、「性」の側面も持つ。

幼児期の性の教育を、狭義ではなく、広義のものとしてとらえる視点と、具体的な目標や指導内容が提示されることが、教育の場での教諭の葛藤を減じさせ、子どもへのよりよい取り組みに結びつくのではないだろうかと考える。

今回の研究は、フォーカスグループインタビュー法で調査したが、グループ作成を保育園ごとにしたことで、仕事上の上下関係が意見に影響を及ぼした可能性は否めない。また、経験年数による意見の違いがあったかどうかについては、経験年数を聞いていないため、検討することができなかった。

V. まとめ

1. 幼稚園での子どもの性に関する質問は出生に関すること、男女の性差などであった。
2. 生に関する教育は必要性から実施まで肯定的にとらえており、日常場面の中で生き生きと行われている。性に関する教育は、必要性を否定的にとらえたり、保留する意見が多かった。
3. 性被害の予防という必要性は強く認識している

が、具体的な方法については疑問や葛藤が大きい。

4. 性に関する教育は、生殖に関する教育ととらえるのではなく、生命の尊厳を感じとる教育という認識に変えられるよう働きかける必要がある。

謝 辞

インタビュー調査にご協力いただきました、幼稚園教諭の皆様へ心から感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 及川裕子. 幼児期の性教育の意義. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要. (11), 1998, p.35.
- 2) 文部科学省. 学校における性教育の考え方, 進め方. ぎょうせい, 1999, p.30-32.
- 3) 小林湊. 教育・新しい視点 [I] 幼児をめぐる社会の動き. 小児科臨床. 48 (増刊号), 1995, p.1524.
- 4) 安梅勅江. ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法. 医歯薬出版株式会社. 2001, p.13-32.
- 5) 平井信義. 心にひびく語りかけ－親子の信頼を深める正しい性の話し方－. 企画室. 1986, p.48-55.
- 6) 文部科学省 “幼稚園教育要領”
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htmh) (2008-10-21)
- 7) 前掲 2), 1999,
- 8) 遠藤恵子他. 幼児に対する性教育の実態. 山形保健医療研究. 第 10 号, 2007, p.1-9.
- 9) 前掲 1), 1998, p.35.
- 10) 前掲 1), 1998, p.35.
- 11) 野口ゆかり他. 幼児期の性教育－幼児期における性に関する保護者・保育士の対応と比較検討－. 母性衛生. 42(1), 2001, p.155-162.
- 12) 及川裕子. 幼児期の性教育の課題－保育者の意識調査を通して. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要. 14, 2001, p.159-164.
- 13) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会. 児童・生徒の性. 学校図書, 2002, p.18-22.
- 14) 上田礼子. 生涯人間発達学. 三輪書店. 1996, p.111-112.
- 15) 柏木恵子、高橋恵子編. 心理学とジェンダー. 金田利子他. 2, 3 歳児の性別認識. 有斐閣, 2003, p.87-93.
- 16) 浦川智江他. 幼児期における性教育に関する保護者の意識調査－施設助産師による性教育の役割と今後の課題. 第 34 回母性看護学会集録集. 2003, p.64-66.
- 17) 中山由香里他. 幼児期の子どもをもつ親の性教育. 第 38 回母性看護学会集録集. 2007, p.62-64.